湯守記録の抜けを不問にする代わりに、点検室で数値を言わされて確認を受け、審査が終わって帰れるはずだったのに、最後は自分の口で名乗り直して確認を受け続けることを決めた番頭の俺

R18

2026年11月24日

目次

第1話　記録の抜け

第2話　点数表

第1話　記録の抜け

　朝の帳場は冷えていた。俺は鍵束を腰に下げて、部屋付け表の前に立った。

「番頭さん、おはようございます」

　湊が帳場に入ってきた。須賀湊、二十三歳。中番になって二年目になる。とにかく声が大きく、朝は特に響く。

「おはよう。声を落とせ。まだお客さんが寝てる」

「すみません」

湊は頭を下げて、当直表を見に行った。俺は木札に目を戻す。今日の客は十一組。満室ではないが、週末だ。昼までに仲居の割り振りを決めておかないと、夕方の到着が重なったときに回らなくなる。木札を並べ終えて、湯守記録の帳面を開いた。湯守記録は、源泉と大浴場、それに露天風呂のある部屋の湯加減を書き留める帳面だ。見回りの時刻、温度計の数値、バルブの開け閉め、異常があったかどうかを、湯守の役を兼ねる番頭が書く。格付け審査のときは、この帳面がそのまま見られる。昨日の欄を見た。十四時、四十二度、異常なし。十六時、四十一度、異常なし。十八時の欄が空いていた。指が止まった。昨日の十八時は、俺の見回りだった。大

女将に呼ばれて帳場で団体の精算を直し、そのあと夕食の部屋付けで仲居と打ち合わせをした。見回りに行ったつもりでいた。行っていない。書き忘れたのではなく、見回りそのものをしていないのだ。

「番頭さん、どうしました？」

　湊が顔をのぞかせた。俺はとっさに帳面を閉じた。

「何でもない。温度計を二本出しておけ。今日の見回りで使う」

「はい」

湊が出ていくのを見送って、俺はもう一度帳面を開いた。空欄は空欄のままだった。今から「十八時、四十一度、異常なし」と書き込めば、書いたことにはなる。今までなら、そうして済ませたかもしれない。だが、今日はだめだ。今日から格付け審査が入る。組合の審査員が泊まり込みで来て、帳面も点検表も全部見ていく。後から書き足した字は、インクの色や筆圧ですぐに分かってしまう。十八年帳場に立っていれば、そのくらいのことは知っている。時計を見た。七時二十分。朝礼まであと十分しかない。審査員が着くのは九時だ。俺は帳面を帳場の引き出しにしまっ

た。空欄のまま、何も直さずに入れた。それが正しいと思ったからではない。直す時間がなかっただけだ、と自分に言い聞かせた。引き出しを閉めたところへ、大女将が来た。

「灯悟、審査の人は九時だね」

「はい」

「帳面はそろっているかい」

「そろえています」

嘘ではない。そろえてはいる。中身に抜けがあるとは言い出せなかった。大女将は俺の顔をじっと見た。何か言いたそうにしたところで、仲居が朝礼の顔ぶれがそろったと呼びに来た。大女将はそちらを向いて歩き出す。助かったと思った。そう思った自分が、一番情けなかった。七時半、朝礼が始まった。仲居が六人、中番が二人、板場からも一人来ている。申し送り帳が読み上げられる。昨日の客の好み、今日の団体の到着時間、露天風呂の掃除の担当。俺はいつもどおりに指示を出した。

「田村様は一階の奥だ。静かなのが好きな方だから、隣は遅くまで空けておけ」

「はい」

「湊、木札を直せ。七号室と九号室が入れ替わってる」
「すみません、すぐ直します」
　声はいつもどおりだったし、手も震えていなかった。それでも申し送り帳が読まれるあいだ、昨日の十八時の空欄が頭から離れなかった。申し送り帳に抜けはない。抜けているのは湯守記録だけだ。それなのに、誰かに見られている気がして落ち着かなかった。朝礼が終わると、仲居が俺のそばに来た。
「番頭さん、露天が少しぬるいそうです」
「すぐ見回りで見る。先に温度計を持って行ってくれ」
「はい」

俺は腰の鍵束に手をやった。源泉のバルブの鍵が指に当たる。冷たい。この鍵は俺しか持っていない。大女将から預かったとき、

「湯を止める鍵だ。人の手に渡すな。落とすな」と言われた。その言葉を十八年守ってきた。見回りは抜かしたのに、鍵だけは腰にある。九時ちょうどに、玄関の鐘が鳴った。仲居たちが声をそろえる。

「いらっしゃいませ」

俺は帳場から出て、玄関に立った。男が一人、立っていた。背が高い。俺より頭半分は上だ。黒いスーツに、小さな鞄が一つ。濡れた傘を自分で閉じて、傘立てに入れた。

「湯守屋の番頭、梶浦灯悟です。お待ちしていました」

　名乗りは決まっている。声の大きさも決まっている。客の目を見て、頭を下げる。男は小さく頭を下げた。

「組合から来ました。真名瀬漣司です。今日から四日間、格付け審査で泊まります」

「真名瀬様ですね。お部屋へご案内します」

　静かに話す人だと思った。言葉も短い。案内を始める前、男の目が帳場の方を一度だけ見た。部屋は二階の奥だ。審査員にはいつも同じ部屋を使っている。窓から源泉の湯気が見える部屋だった。案内の途中、真名瀬は何も聞かなかった。部屋に入って鞄を置くと、すぐに口を開いた。

「九時半から帳場の確認をします。部屋付け表と当直表と、湯守記録を持ってきてください」
「九時半は、お発ちのお客さまの精算が重なります。十時ではいけませんか」
「九時半でお願いします」

丁寧な言い方だったが、断れる空気ではなかった。俺は頭を下げて部屋を出た。廊下に出たところで息を吐く。手のひらが汗でぬれていた。九時半。帳場の奥の小部屋に、真名瀬が座っていた。俺は部屋付け表の写し、当直表、湯守記録の三つを机に置いた。真名瀬は当直表から目を通した。指で日付を追う。次に部屋付け表、最後に湯守記録を開いた。紙をめくる音だけが部屋に響く。座れと言われなかったので、俺は立ったまま待った。真名瀬の指が止まった。

「昨日の十八時が空いています」

胸の奥がどきりとした。

「確認します」

　空いているのは最初から知っているのに、とっさにその言葉が口から出た。
「空いている理由を言ってください」
「記録を、書き忘れました」
「書かなかっただけですか。見回りには行きましたか」
　俺は答えられなかった。真名瀬が顔を上げる。声の調子は変わらないまま、ただ俺を見ていた。
「申告が遅れていますね」
「……申し訳ありません」
「見回りをしていない時間があると、格付けでは減点になります。湯守記録の抜けは、湯の管理ができていないという扱いです」
「……はい」

「それで、空欄のまま持ってきたのですか」

　俺は口を閉じた。そのまま持ってきたのは本当だ。ごまかさなかったのも本当だ。だが、見回りに行かなかったのも本当だった。

「昨日の十八時、私は帳場で精算を直していました。大浴場には行っていません。記録の抜けではなく、見回りの抜けです」

　言ってから、腹のあたりがすっと冷えた。番頭が自分の口で認めていい失態ではない。大女将が聞いたら何と言うか。それでも、言ってしまった。真名瀬は手元の紙に短く何か書き込んだ。俺には見せなかった。

「今夜、再点検をします」

「……今夜ですか」

「昨日の十八時の分です。大浴場の湯加減とバルブの状態を、私が立会いで確認します。二十一時、帳場に来てください」
「二十一時ですと、ちょうど最後のお客さまが風呂から出る頃です」
「そのあとで結構です。あなた一人で来てください」
　俺は頭を下げた。
「分かりました」
　小部屋を出ると、湊が帳場に立っていた。
「番頭さん、大丈夫ですか。顔色が悪いですよ」
「何ともない。昼の見回りは俺が行く。お前は部屋付けを手伝え」

「はい。あの、審査の人、なんだか怖いですね」

「口より手を動かせ」

湊は慌てて帳場を出ていった。昼の見回りは全部自分で回った。大浴場は四十二度、露天は四十一度。露天のある部屋は、その露天も温度計で測り、手でも触った。十八年やっていれば、手で触っただけで湯加減が分かる。四十二度は指先が少ししびれるが、四十一度はしびれない。記録は漏れなく書いた。字はいつもより硬くなっていた。夕方、客が次々と到着して帳場は忙しくなった。精算、部屋の案内、夕食の時間の確認、仲居への指示。いつもどおりの声で話し、客の顔を見て好みを思い出す。静かな部屋を好む常連の田村様も、予定どおり一階の奥へ案内した。そういう仕事は体が覚えている。それでも二十

一時が近づくにつれて、気持ちはどんどん重くなっていった。二十時五十分。最後の客が大浴場から出て、仲居が入口の戸を閉めた。

俺は当直の仲居に声をかけた。

「大浴場に再点検が入った。二十一時から三十分ほど閉める。露天のある部屋のお客さまには、部屋の露天を使ってもらってくれ」

「分かりました、番頭さん」

嘘ではない。再点検は本当にある。ただ、どんな点検になるのかは、俺も聞いていなかった。二十一時。帳場の前に真名瀬が立っていた。スーツではなく、旅館の浴衣を着ている。歩くときの布の動きで、下に何も着ていないのが分かった。俺も作業着から浴衣に着替えてあった。湯の点検は浴衣で行うのが決まりだ。

「行きましょう」

真名瀬は温度計と点検表、それに自分の鞄を持っていた。俺は腰の鍵束を確かめる。源泉のバルブの鍵もその中にある。重さはいつもと同じだった。脱衣場を抜けて、大浴場の戸を開けた。湯気が顔にかかり、硫黄のにおいが鼻をつく。真名瀬が内側から戸に鍵をかけた。カチリ、と乾いた音が響いた。

「点検中は誰も入れない決まりですよね」

「はい」

俺は湯の前にしゃがんで、温度計を入れた。四十二度。いつもどおりだ。

「数値を言ってください」

「大浴場、四十二度です」

「バルブの状態は」

「異常ありません。開け閉めも問題ないです」
「手でも確認してください」
　湯に手を入れると、指先が少ししびれた。間違いなく四十二度だ。
「手で触っても四十二度です」
「あなたの感覚は記録になりますか」
　真名瀬が点検表を持ったまま、一歩近づいた。
「昨日の十八時、あなたの手はここになかった。今夜は記録に残る形で確認します。湯加減を、体の反応で取ります」
「……どういうことでしょうか」
「湯に入ってください。点検の段取りで確認します」

俺は浴衣の帯に手をかけたまま、動けなくなった。湯守が湯に入ること自体は珍しくない。底の状態を見るために入ることは、仕事としてある。だが、人が見ている前で脱ぐのは初めてだった。

「早くしてください。点検の時間は決まっています」

俺は帯を解いた。鍵束を外した。浴衣を畳んで、その上に鍵束を置いた。下には何も着けていない。裸で湯の前に立った。真名瀬は俺の体を見た。顔ではない。肩、腕、腹、ちんぽ、脚と、上から順に見ていった。点検表を確認するときと同じ、落ち着いた目つきだった。

「入ってください」

　俺は湯に入った。熱さが脚から上がってきた。肩までつかると、息が短くなった。真名瀬は湯の縁に座って、温度計をもう一度見た。

「四十二度。体でどう感じますか。数値で言ってください」

「熱いです」

「それは数値ではありません」

「……肩まで熱いです。指先がしびれます」

「昨日、ここにいれば書けた記録です」

　俺は何も言えなかった。湯の中で手が震えた。熱さのせいだけではなかった。

「上がってください」

湯から上がった。体から湯が落ちた。ポタッポタッタイルに足の裏が張りついた。真名瀬が立った。タオルは渡されなかった。代わりに腕を取られた。手が冷たかった。湯上がりの肌には、はっきり冷たかった。真名瀬の手が手首から肘へ動いた。手、腕、肩と、上から順に触っていく。

「湯加減の確認です。体のどこが熱くなっているか、順に言ってください」

「手は、熱いです」

「腕は」

「腕も熱いです」

「肩は」

　真名瀬の手が肩から首筋へ動いた。指が首の横を押した。脈のところだ。ドクン、ドクンと速く打っていた。

「首はどうですか」

「熱い、です」

　声が上ずった。帳場では出したことのない声だった。俺は口を閉じた。真名瀬の手は胸へ下りた。指が乳首に触れた。肩が跳ねた。

「動かないでください。点検中です」

「……はい」

　指が乳首をつまんで、軽く引いた。

「っ……」

湯で温まった体は、いつもより感じた。乳首が固く立った。真名瀬はそれを見たが、点検表には書かなかった。鞄から小さいメモ帳を出した。

「これは私用の確認メモです。点検表には書きません。あなたの体の反応は、ここに残します」

「そんなもの、やめてください」

「昨日の記録の抜けを、どう埋めますか」

俺は答えられなかった。格付けが下がれば、客が減る。番頭の俺の立場もなくなる。大女将は俺に鍵束を預けた。その鍵束が今、畳んだ浴衣の上にある。真名瀬の指が、もう一度乳首を押した。今度は強かった。痛かった。痛いのに、下腹が熱くなった。ちんぽが持ち上がり始めた。湯上がりの裸だ。隠すものがない。全部見られている。

「体の反応は正直ですね。今の状態を言ってください」

「……無理です」

「では、メモには私が書きます。あなたの言葉で残すか、私の言葉で残すか、選んでください」

　選んでください、と真名瀬は言った。でも、どちらを選んでもメモには残る。
「……勃起しています」
「誰が」
「俺が、です」
「名前で言ってください」
「梶浦灯悟が、勃起しています」
　言ったとたん、顔が熱くなった。湯の熱さとは別の熱さだった。真名瀬はメモに短く書いた。俺には見せなかった。手が腹へ下りた。へその下を通って、毛に指が触れた。ちんぽを握られた。冷たい手だった。俺は息を止めた。
「湯加減はどうですか」
「熱いです。体が熱いです」

「ここは」

　手が動いた。ゆっくり握って、根元から先へしごいた。点検のときと同じ、順番どおりの丁寧な手つきだった。ちんぽは手の中でどんどん固くなった。先から我慢汁が出た。真名瀬は指でそれを亀頭に塗り広げて、また握った。クチュ

「ふっ……く……」

　脚が震えた。立っているだけで精一杯だった。手が止まった。真名瀬は俺の顔を見ていなかった。握ったちんぽを見ていた。

「脚の感覚も言ってください。湯から上がったあと、どこが熱いままですか」

「ふくらはぎが熱いです。足の裏も熱いです」

「湯守の見回りでは、湯の底の状態も見ることになっています。足の裏が熱いのは、底の湯が回っているからです。あなたの体で確認できました」

　仕事の言葉だった。でも手はまだちんぽを握っていた。指が根元まで下りて、玉に触れた。俺は腰を引いた。

「動かないでください」

「そこは点検と関係ないでしょう」

「関係は私が決めます。今夜は体の反応を見ます」

手のひらが玉を包んだ。軽く持ち上げて、離した。手が乳首に戻った。右、左、右と順番につままれた。つままれるたびに、俺はその順番を体で覚えていった。俺は壁に手をついた。タイルが冷たかった。冷たさで少し落ち着いた。でも手がちんぽに戻ると、すぐにまた固くなった。

「声を出していいです。点検中は誰も入りません」

「だめです。廊下に、仲居が」

「戸には鍵をかけました。言ってください。今どうなっているか」

手の動きが速くなった。クチュ、クチュ、クチュ我慢汁でぬれた音が、大浴場に響いた。俺は壁のタイルに爪を立てた。

「勃起して、感じて、います……」

「誰が」

「梶浦灯悟が、感じています……っ、あ、出る……」

　射精した。ビュッビュルッ精液が真名瀬の手と、俺の腹に飛んだ。湯で赤くなった肌に、白い精液がはっきり見えた。腰が何度も前に出た。そのたびに、まだ出た。俺は息を切らして立っていた。膝が震えていた。真名瀬は手を湯で流した。それからタオルで俺の腹を拭いた。ちんぽの先も拭いた。拭き方まで、点検のときと同じ丁寧さだった。

「今夜の再点検は終わります。昨日の抜けは、今夜の確認で補いました。点検表には、大浴場四十二度、異常なし、と書いてください」

「……はい」

「確認メモは私が持ちます。明日は点数表の確認から始めます。九時に帳場へ」

俺は浴衣を着た。帯を結ぶ手が震える。鍵束を腰に下げて、バルブの鍵を指で探した。あった。一番大きくて、角が欠けた鍵だから形ですぐに分かる。これだけは渡していない。そう思うと、少しだけ息ができた。真名瀬は戸の鍵を開けて、先に脱衣場を抜けていった。帯もきちんと結ばれていて、普段と変わらない歩き方だった。俺は脱衣場の鏡の前で足を止めた。頬も首も赤い。帳場に立てる顔ではなかった。冷たい水で二回顔を洗ったが、熱は引かなかった。メモは真名瀬が持っている。「勃起しています」と自分の名前で言った言葉が、今は真名瀬の鞄の中にあ

る。俺の手では取り返せない。それでも鍵は俺の腰にある。そのことだけで、何とか立っていられた。大浴場を出ると、廊下は静かだった。当直の仲居が帳場で頭を下げる。

「番頭さん、お疲れ様でした」

「ああ。大浴場はもう開けていい」

　いつもの声で答え、いつもの顔で帳場に立った。だが浴衣の下の体はまだ熱く、首筋に指の感触が残っていた。引き出しを開けて、湯守記録に今夜の分を書く。二十一時、大浴場、四十二度、異常なし。字はいつもどおりに書けた。そのすぐ上に、昨日の十八時の欄が空いたまま残っている。俺はそこには何も書かず、帳面を閉じて引き出しに鍵をかけた。帳場の時計が二十三時を指した頃、当直の仲居がお茶を持ってきた。

「番頭さん、まだ起きてるんですか」

「記録を見直していた。もう上がるよ」

「明日も審査ですよね。大変ですね」

「大変なのは皆同じだ」

お茶を一口飲んだ。すっかり冷めていた。部屋に戻って布団に入っても、なかなか眠れなかった。天井を見ていると、隣の部屋から客のいびきがかすかに聞こえてくる。点検表には「大浴場四十二度、異常なし」と書いた。今夜の体のことは、公の帳面のどこにも書いていない。書いてあるのは真名瀬のメモだけだ。俺が自分の名前で言った言葉が、俺の知らない字で残っている。そう思うと、腹の奥がまた熱くなった。恥ずかしいだけではなかった。握られた手の冷たさを思い出し、布団の中でちんぽがまた固くなりかけた。自分の首に手を当てると、脈が速かった。昼に帳場に立つ体と、今の体は同じ体なのだ。そのことが、どうしても割り切れなかった。明

日は九時から点数表の確認だ。真名瀬が次に何を言い出すのか、俺には見当もつかなかった。枕元の鍵束に手を伸ばし、バルブの鍵の欠けた角を指で確かめてから、俺は目を閉じた。

第2話　点数表

　次の朝、俺は五時に起きた。眠れたのは三時間ほどだった。目が覚めたとき、無意識に自分の首筋に手を当てていた。昨夜の指の感触がまだ残っている気がして、慌てて手を離し、冷たい水で顔を洗った。鏡に映った顔はいつもどおりだった。それを見て少し落ち着いた。帳場に出ると、湊がもう来ていた。

「番頭さん、おはようございます」

「早いな」

「審査の間は早く来ようと思って。点数表って、今日見るんですか」

「お前には関係ない。朝の見回りの準備をしろ」
「はい」
　湊が温度計を取りに行ったあと、俺は点検表の束をそろえた。部屋の点検表、布団の点検表、湯加減の点検表。昨日、昼間に全部回って書いたものだ。字も数値もきちんとそろえたつもりだった。九時、真名瀬が帳場に現れた。昨日と同じスーツで、手には点数表の用紙と、昨日の鞄がある。あの鞄の中に確認メモが入っている。
「おはようございます。梶浦です。本日もよろしくお願いします」
「九時から点数表の確認をします。点検表を持って小部屋へ」

俺は点検表の束を抱えて小部屋に入った。真名瀬は点検表を一枚ずつ確認していく。部屋の点検、布団の点検、湯加減の点検。指先が紙の上の数値を追う。昨夜、俺のちんぽを握った指だった。

「七号室の点数が合いません」

俺は点検表をのぞき込んだ。七号室の欄だ。布団が五点、枕が三点、部屋の乱れが二点。急いで書いたので、五の字がつぶれて八に見える。合計の欄には十三点と書いてあった。五と三と二なら十点だ。帳場でまとめて足したとき、自分の字を八と読み違えたのだ。

「合計が合わない部屋は、点検していない扱いになります」

「申し訳ありません。足し間違いです。七号室は昨日、私が自分で見ました」
「では、内訳を全部言ってください」
「布団が五点、枕が三点、部屋の乱れが二点、合計十点です」
「点検表には十三点とあります。どちらが本当ですか」
「十点が本当です」
「では、なぜ十三点と書いたのですか」
　俺は正直に答えた。点検のあと帳場でまとめて書いたこと。自分の字を読み違えたこと。忙しくて足し直さなかったこと。真名瀬は点数表に短く何か書き込んだ。俺の位置からは読めなかった。
「数値を声に出して言う練習をします」

「……ここで、ですか」

「あなたは記録をまとめ書きする癖があります。数値はその場で声に出す。声に出した数値は間違えにくい。今夜、点数表の数値が合うかどうか、声で確認します」

「今夜もですか」

「二十一時、点検室です。点検の段取りで、手と腕と首筋の確認もします。昨日の湯加減の続きです」

　点検室は一階の奥にある狭い部屋だ。布団の見本と点検表の予備、それに畳み方の見本帳が置いてある。客は入らないし、仲居も普段はあまり出入りしない。

「その時間は、帳場の締めが遅れます」

「二十一時はお客さまの夕食が終わる時間です。帳場の締めはそれまでに済ませてください」

　俺は黙って頭を下げた。

「分かりました」

　小部屋を出ると、湊が帳場で木札を並べていた。

「番頭さん、どうでした？」

「点数の足し間違いだ。お前も気をつけろ。合計は必ず口に出して足せ」

「えっ、いちいちですか」

「ああ。口に出せば間違えない」

自分で言っておきながら、胃のあたりが重くなった。今夜、俺が口に出すのは点数だけでは済まない。昨夜と同じように、自分の体のことを言わされるのだろう。それが分かっていながら、湊の前では番頭の顔でそう言った。昼、見本帳を持って七号室へ向かった。湊もついてくる。七号室は客が発ったあとで、布団が敷きっぱなしになっていた。俺は布団の角を手で直す。見本では角をきっちり合わせ、枕は窓側に寄せて端をそろえることになっている。湊が見本帳を手に聞いた。

「番頭さん、布団の点数はどう付けるんですか」

「角がそろえば二点、しわがなければ二点、厚みにむらがなければ一点。全部で五点だ」

「枕は？」

「位置で二点、向きで一点」

「部屋の乱れは」

「物が元の場所にあれば二点、なければ一点か零点だ」

　俺は声に出しながら布団を直した。

「角、二点。しわ、二点。厚み、一点。布団、五点」

　続いて枕を置き直す。

「位置、二点。向き、一点。枕、三点。乱れ、二点。合計、十点」

　湊が点検表に書き込む。字が俺より大きい。

「番頭さん、今日は声が大きいですね」

「審査の間はこうしろ。数値は声に出すんだ」
「はい、僕もそうします。口で言うと、本当に間違えませんね」
「ああ」
「昨日はなんで間違えたんですか」
「まとめて書いたからだ。その場で書いて、その場で言え」
　湊はまじめな顔でうなずき、自分でも
「五、三、二、十」と声に出した。合っていた。その声を聞いて、昨夜の自分の声を思い出した。大浴場で「勃起しています」と名前で言った声だ。あの声も、今の声も、同じ口から出ている。布団の角を直す手が止まった。

「番頭さん、手が止まってますよ」
「何でもない。次は八号室だ」
　八号室も九号室も声に出して点検した。声に出すたび、今夜のことを考えてしまう。今夜は手と腕と首筋だと言われた。昼に布団を触った手が、夜は触られる側になる。手、腕、首筋。決められた順番が頭から離れず、八号室の枕を直しているあいだ、首筋が熱くなった。昼過ぎ、常連の客が帳場に立ち寄った。
「番頭さん、今日の湯はいいね」
「ありがとうございます。四十二度にしてあります」
「あんたが見回ってくれるから安心だよ」

客は笑って部屋へ戻った。俺もいつものように笑い返したが、気持ちは沈んだままだった。安心だと言われるたびに、一昨日の十八時の空欄が頭をよぎる。夕方、大女将が点数表のことを尋ねてきた。

「点数が合わなかったそうだね」

「はい。私の足し間違いです。今夜、確認し直します」

「格付けに響くのかい」

「響かせません」

大女将は俺の目をまっすぐ見た。

「灯悟、あんたに任せているんだからね」

「はい」

その一言が重かった。鍵束も、帳場も、湯も任せられている男が、今夜、点検室で自分の体のことを声に出す。大女将には言えない。誰にも言えない。言えないことばかりが、真名瀬のメモの中に増えていく。二十時半、夕食が終わって客が部屋に戻った。仲居が帳場に申し送りを置いていく。当直表に目を通すと、今夜の当直は湊だった。湊は二十三時まで帳場にいる。点検室は帳場から廊下を挟んだすぐ先で、大きな声を出せば聞こえる距離だった。

「湊、今夜は帳場を離れるな。お客さまに呼ばれたらお前が出ろ」

「分かりました。番頭さんは点検ですか」

「ああ。審査の再確認だ」

「遅くまで大変ですね」

「仕事だ」

　俺は点検表と見本帳を持って点検室へ入った。二十一時ちょうどに、真名瀬が来た。浴衣姿で、手には点数表と私用の確認メモ、それに布団の幅を測る細い物差しを持っている。

「戸を閉めてください」

　俺は戸を閉めた。点検室は狭い。昼の練習用に、見本の布団が一組床に敷いてある。真名瀬は物差しを棚の端に置いた。

「今日の点検は、段取りどおりに進めます。まず手、次に腕、次に首筋。あなたはされたことを短い言葉で言ってください。昨日のような長い言い訳は要りません」

「……どう言えばいいんでしょうか」
「手を見られています、腕を触られています、そのように」
「それが点数の確認と何の関係があるんですか」
「数値を声に出す練習です。自分の状態を声に出す練習でもあります。始めます」
　真名瀬は俺の前に立った。作業着のままの俺と、浴衣の真名瀬。見た目だけなら客と番頭だが、段取りを決めるのは真名瀬だった。
「手を出してください」
　両手を差し出すと、真名瀬は俺の右手を取り、親指、人差し指、中指と一本ずつ開いた。点検の順番どおりだった。手のひらを返し、手首を握る。

「言ってください」
「……手を見られています」
「次」
　左手も同じように、指の間から爪の先まで見られた。湯守の手は湯でふやけやすく、指先が少し荒れている。その手が今、点検を受けていた。
「腕へ進みます」
　真名瀬は俺の作業着の袖を肘の上までまくり、両手で包んで二の腕から肘の先へと順に押して確かめた。
「言ってください」
「腕を触られています」
「力が入っていますね。どうなっていますか」

「張っています」
「誰の腕が」
「梶浦灯悟の腕が、張っています」
　真名瀬はメモに書き込んだ。俺の言葉をそのまま書いているようだった。
「首筋へ進みます。作業着の前を開けてください」
　俺は作業着のボタンを外した。胸の半分まで開けた。点検室の空気は冷たかった。首筋に冷たい空気が触れた。真名瀬の手が首に触れた。昨日の大浴場と同じ指だった。首の横の、脈のところを指が押した。脈が速くなったのが自分でも分かった。
「言ってください」
「首筋を触られています」

「脈はどうですか」

「速いです」

「理由を。短く」

「緊張しています」

　指が首から鎖骨へ下りた。鎖骨の下を押して、胸へ進んだ。開けた作業着の間から手が入った。指が乳首に触れた。俺は息を止めた。

「言ってください」

「胸を触られています」

「乳首はどうなっていますか」

「……立っています」

「誰の」

「梶浦灯悟の乳首が、立っています」

　指が乳首をつまんだ。昨日より長かった。つまんで、回して、引いた。

「んっ……」

　痛かった。その痛みで、下腹が熱くなった。作業着のズボンの中で、ちんぽが固くなり始めた。真名瀬はそれを見た。目で見ただけで、手は胸から離れなかった。

「下も反応していますね。言ってください」

「無理です。廊下の向こうに、湊が」

「小さい声で結構です。短く」

　廊下の向こうで、帳場の電話が鳴った。湊の声がした。はい、湯守屋です。いつもの声だった。俺はその声を聞きながら、ズボンの中でちんぽを固くしていた。

「言ってください」

「勃起しています」

「誰が」

「梶浦灯悟が、勃起しています」

　声を落として言った。落とした声の方が、自分の耳にははっきり聞こえた。真名瀬は作業着の前を全部開けた。ズボンの上から、ちんぽを手で押した。布の上からでも形が分かった。手が布の上を上下に動いた。俺の腰が棚に当たった。端に置いてあった物差しが床に落ちた。カタン俺は戸の方を見た。湊が来るのではないかと思った。足音はなかった。電話の声も止んでいた。

「こちらを見てください。点検中です」

「はい」

真名瀬はズボンの前を開けた。下着の中に手が入った。ちんぽをじかに握られた。冷たい手だった。部屋の冷たさと手の冷たさで、体が震えた。

「数値を言ってください。今の状態を、点数で」

「……八点、です」

「八点の理由は」

「分かりません。……硬い、からです」

真名瀬はメモに書かなかった。代わりに手を動かした。ゆっくり握って、根元から先へしごいた。先から我慢汁が出て、真名瀬の手がぬれた。そのぬれた手でまた握られた。クチュクチュ小さい音だった。点検室の中にだけ響いた。もう片方の手が乳首をつまんだ。ちんぽと乳首を同時にいじられた。首筋に口が近づいた。触れてはいない。息だけがかかった。

「ふっ……ぅ……」

声が出そうになって、俺は歯を食いしばった。手の動きが止まった。真名瀬はちんぽを握ったまま、俺を見ていた。

「点検の順番を言ってください。今日、触った順です」

「手、腕、首筋、胸です」
「その順番で、もう一度確認します」
　ちんぽから手が離れた。ちんぽは固いまま、下着の外に出されたままだった。手が首筋に戻って、指が脈を押した。次に腕を取られて、肘の内側を押された。そこも脈が速かった。次に手のひらを開かれて、指先を一本ずつ押された。手、腕、首筋、胸。触られた順番は、はっきり覚えていた。昼の点検の順番と同じで、もう忘れられそうになかった。
「順番は、もう体に入っていますね」
「……こんなやり方で」
「明日はこの順番が、部屋と布団の点検にも出ます。あなたの体で覚えた順番です」

俺は何も言えなかった。下腹の熱さは引いていなかった。触られていないのに、ちんぽは上を向いたままだった。先から我慢汁が垂れて、ズボンに落ちた。手がちんぽに戻った。握られたとたん、腰が前に出た。

「声は落として出していいです。短く言ってください。今どうされていますか」

「手で、されています」

「誰に」

「真名瀬様に」

「何を」

「ちんぽを触られています。乳首も触られています」

言いながら、腰の奥が熱くなった。手が速くなった。クチュ、クチュ、クチュ脚が震えた。俺は見本の布団の端をつかんだ。布団がずれた。昼の練習で敷き直したばかりの布団だった。

「出る前に言ってください」

「出そうです……」

「名前で」

「梶浦灯悟が、出そうです……っ、あ……」

射精した。ビュッビュッ真名瀬の手の中に精液が出た。指の間からあふれて、下着にもかかった。俺は布団の端に手をついたまま、息を切らした。廊下で足音がした。湊だった。誰かを案内して、点検室の前を通った。

「お部屋はこちらです。大浴場はあちらの奥です」

　明るい声だった。俺は動けなかった。作業着は開いたままで、ズボンも開いたままだった。ちんぽは精液でぬれて、外に出たままだった。真名瀬の手つきは落ち着いていた。タオルで俺のちんぽと下腹と、自分の手を拭いた。ズボンの前を閉めて、作業着のボタンを一つずつ留めた。俺の手は震えて、ボタンが留められなかったからだ。足音が遠ざかった。

「若手の前では平気な顔をしてください。それが番頭の仕事です」

　真名瀬は点数表に丸を付けた。

「今夜の確認は終わります。点数表の数値は、声で確認できました。合計の間違いは、私の点数表では不問にします。ただし、確認メモは残ります」

「メモは、どうするんですか」

「私が持ちます。明日は部屋と布団の点検の順番を見ます。夜の分は、昼の点検のあとで言います」

　明日も夜がある。そう告げられたのと同じだった。俺は作業着を整えた。鏡がないので、手で髪を直す。床に落ちていた物差しを拾って棚に戻し、点検室を出て帳場へ戻った。湊が帳場に立っていた。

「番頭さん、お疲れ様です。点検、終わりましたか」

「ああ、終わった」

「顔、赤いですよ。点検室、暑かったんですか」

「布団の確認で動いたからだ。お前は当直を続けろ」

　平気な顔を作り、平気な声で答えた。湊は疑う様子を見せなかった。いつもの番頭に見えたのだろう。だが作業着の下では、首筋に指の感触が残っていた。押された脈のところが、まだ速く打っている。帳場の時計は二十二時を指していた。俺は昼に湊と確認した七号室の点検表を取り出し、昨日の書き間違いを、控えの欄に直して書いた。七号室。布団五点、枕三点、乱れ二点、合計十点。

「五と三と二で、十」と小さく声に出して足した。今度は合っていた。声に出すと間違えない。真名瀬の言ったとおりだった。それが余計にこたえた。点検室で口にした言葉も、声に出したから頭から消えないのだ。「手を見られています」「腕を触られています」「勃起しています」「ちんぽを触られています」。全部、俺の声で言った。メモの字は真名瀬の字でも、中身は俺の言葉だった。

帳場を湊に任せて、洗面所で顔を洗った。冷たい水を首筋にもつける。脈のところに水が触れると、指で押された感覚がよみがえった。タオルで強く拭いても、その感触は消えなかった。部屋に戻る前、少しだけ玄関の外に出た。夜の空気は冷たく、源泉の湯気が白く上がっている。昼間は客を迎える場所だが、今は誰もいない。湯は今日も四十二度で、バルブは開いていて湯は回っている。その鍵は俺が持っている。だが、点数表の丸は真名瀬が付け、不問にするかどうかも真名瀬が決めた。俺は腰の鍵束を握り、バルブの鍵の重さを手で確かめた。自室に戻って戸を閉め、机の上に明日の点検表の予備を置いた。まだ何も書いていない白い用紙だ。明日の夜

に言わされることは、この紙には書かれない。書かれるのは点数だけで、口にした言葉は真名瀬のメモに残る。用紙を裏返しても、明日は来る。行かないと言えば、七号室の十三点が格付けに残る。任せていると言った大女将の顔が浮かび、断ることはできなかった。布団に入り、鍵束を枕元に置いた。バルブの鍵の欠けた角を指で確かめる。あった。今日も渡していない。それを確かめてから目を閉じた。目を閉じても、手、腕、首筋、胸という順番が残った。その次に握られた場所が、布団の中でまた熱くなった。眠りは浅かった。明日も五時に起きて帳場に立ち、湊の前では平気な顔をする。それが今の俺の仕事だった。

ほかの作品はサークルページから

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker_id/RG01054794.html

奥付

作品名 湯守記録の抜けを不問にする代わりに、点検室で数値を言わされて確認を受け、審査が終わって帰れるはずだったのに、最後は自分の口で名乗り直して確認を受け続けることを決めた番頭の俺

サークル タビューへ

発行日 2026年11月24日

レーティング R18